

した此の時水腫は見る事が出来なかつた。

十月卅一日には尿全く出ない故に、先づ兩側の腎臓をX光線にて照らした。翌日になりて尿は一八蚝しかでない、依つて全身麻酔にて兩側腎の皮膜をはがした。此の時可成に嘔吐があつた。

二月二日になつて非常に疲労を訴へしが、尿は八五〇を排泄し、蛋白質  $1\frac{1}{2}\%$ 、沈渣には赤血球なく、多數の白血球僅かの硝子様及顆粒狀圓柱を見た、十一月三日になりて尿量一二〇〇瓦、比重一〇・一〇、十一月四日、尿量二二八〇蚝、比重一〇・一二、時々嘔吐あり、尿には細菌がない。血液中の窒素は四六三・八蚝、十一月五日に尿量一六〇〇蚝、斯くして十一月十二日に開復術の創傷に化膿を起し、肺水腫を合併して死亡した。

以上の病歴に於て十一月一日に腎の皮膜剝離術を行ひ此の時腎組織の一片を取りて檢せり、絨毯體には變化なく、一般絨毯體の係蹄は赤血球にて満たされ著名なる變化は間質の結締織内に圓形細胞の竈狀の浸潤ありて此の浸潤内に多核白血球あり、尙エオジン嗜好細胞が多數にありしも鹽基性嗜好細胞はなし、

曲細尿管の主部は全く腫脹して居り管腔は殆ど無いやうに見

えた、尙上皮の剝脱及新生を見られた。

以上の所見から臨床上、間質性腎炎の診斷は困難であるが、無尿症に就て間質の浸潤が著明であると云ふことが關係あるものと考へた。此の時血壓は少しも高まつて居らぬ、勿論、眼底に於て變化なく蛋白尿性網膜炎もなかつた。

尙本例は猩紅熱に關係あるも絨毯體には變化がなかつた。

(Virch. Arch. 1930. Bd. 279)

## 胃及胃キキスの悪性貧血療法

Meulengracht, E. 共述

A. Kechi, Johansen.

悪性貧血の療法に在來肝臓が賞揚せられしが Scurry, Isaacs 氏等は胃の乾燥を以て本病を治療して効果がありたるを著者は六例に於て之を追試せり、即ち胃を乾燥して脂肪を除きたる粉末を一日二〇―三〇瓦投與した。此量は生な豚の胃の一三〇―二〇〇瓦に相當する量である。此治療成績は肝臓療法を稜ぐと併し乍ら胃のエキスにては効果がなかつた。

(Ugenkr. Laeg. 1. 1930)